

## 看護職に対するイメージについて

### 一年代別による比較検討一

木 子 莉 瑛・木 原 信 市・越 智 由 紀 子・梅 木 彰 子  
佐 藤 友 紀\*・高 木 恵 美 子\*\*

### The Generation gap in Impression to Nurse

Rie KIGO, Shinichi KIHARA, Yukiko OCHI, Shoko UMEKI, Yuki SATOU and Emiko TAKAKI

#### Abstract

The purpose of this study is to clarify the impression to nurse by each generation. The subjects were 655 persons, consisting of puberty (a teen-ager), youth (a person in the twenties and thirties), middle age (a person in the forties and fifties) and old age (a person in the sixties and over). This study disclosed the following results.

The generation, of nearly old age, who came in more contact with nurse, had significantly better impression than other generations. On the other hand, youth had significantly worse impression to nurse than other generations. As an bad impression, there were hard work and low wages for it, few holidays, incompatibility with a family life, inadequate assessment from society, and job of only younger.

#### はじめに

近年、患者の高齢化、疾病構造の複雑化、在院日数の短縮、医療情報化など看護を巡る医療の主な動向は多様に変化している。医療関係者の中で医療サービスを受ける多くの人々が最も多く接触するのは看護婦であり、先に述べたような医療環境のなかで看護婦の行動は医療サービスの質を決定する大きな要因となりうる。

看護職は重要視されている一方、看護婦独自の能力はそれほど評価されていない<sup>1)</sup>。こうした認識に関して、水野<sup>2)</sup>は「社会には看護婦についてある種の固定化したイメージがあり、それが専門職の確立を阻害しているという見方がある」と述べている。しかし、看護婦に対する捉え方は対象の様々な背景によって左右されたり、マスコミなどの影響を受けることにより流動的であると考ええる。看護学生を対象とした調査では、「看護婦を重要でやりがいのある職業」という好意的イメージを持っていることが報告されている<sup>3)</sup>。看護婦に対するイメージが固定化されているとは一概に言い難い。

看護婦は自分たちが社会にどのようにイメージされ、何を期待されているかを知り、さらに社会のニーズにあった看護を追求しなければならない。看護の対象は、何らかの疾病をもって病院に訪れる患者だけではなく、健康者も含んだ全ての人である。それ故に患者だけではなく一般人の看護婦に対するイメージを知ることも必要である。これまでも看護に関するイメージ調査は数多く行われてきたが<sup>4) 5) 6) 7)</sup>、そのほとんどが看護学生や患者団体を調査対象としたものであり、一般人を対象としたものは少ない。そこで、今回我々は一般人を対象に各年代における看護職に対するイメージを調査し、各年代に適した看護の手掛かりを得る目的でこの研究を行った。

#### 研究方法

##### 1. 調査対象

看護学生、看護婦を除く、10～90歳代の一般学生及び社会人661名（男性326名、女性335名）を対象とし、有効回答は655名（99.1%）であった。

##### 2. 調査方法

質問紙調査法によるアンケート調査

##### 3. 調査内容

看護職に対するイメージについてのアンケートの質問項目は、藤原らの行った調査など<sup>8) 9) 10) 11)</sup>を参

\* 鵬翔高等学校

\*\* 済生会熊本病院

考に4グループに分け計45の形容詞対を選択した。

- (1) 対象者の背景：年代、性別、入院経験の有無など

年代はレビンソンの発達段階を基に10歳代（思春期及び青年期）、20・30歳代（青年期）、40・50歳代（中年期）、60歳代以上（向老期及び老年期）に分類した。

- (2) 看護職に対するイメージについて（表1）

- 1) 「性格的因子」：15項目  
2) 「専門性因子」：10項目  
3) 「労働条件因子」：8項目  
4) 「職業イメージ因子」：12項目

#### 4. 解析方法

看護職のイメージの測定はSD法を用いて、45項目形容詞対（表1）の左側の形容詞を好イメージ、右側の形容詞をマイナスイメージとして5段階評定（2～2）を行い、好イメージにはプラス得点を与えた。そして年代や性別、入院経験の有無について看護職に対するイメージに影響を与える項目ごとに平均点を算出し、統計学的有意差の検定はt検定で行い、危険率5%以下を有意差があるとした。

## 結 果

### 1. 対象者背景

有効回答を得られた655名中、10歳代（以下「思春期」と略す）141名（21.5%）、平均年齢15.4歳、20・30歳代（「青年期」と略す）166名（25.3%）、平均年齢27.8歳、40・50歳代（「中年期」と略す）223名（34.1%）、平均年齢48.8歳、60歳代以上（「向老期」と略す）125名（19.1%）、平均年齢70.5歳であった。男女の内訳は図1に示すとおりである。

「入院経験の有無」という項目においては、「思春期」141名中「あり」と回答した人は30名（21.3%）、「なし」は111名（78.7%）、「青年期」166名では「あり」83名（50.0%）、「なし」83名（50.0%）、「中年期」223名では「あり」176名（78.9%）、「なし」45名（20.2%）「無回答」2名（0.9%）、「向老期」125名では「あり」97名（77.6%）、「なし」26名（20.8%）、「無回答」2名（1.6%）であった（図2）。

### 2. 看護職に対するイメージの全体的傾向

看護職におけるイメージについて、それぞれ「性格的因子」、「専門性因子」、「労働条件因子」、「職業

表1 各因子の項目

性格的因子 (15項目)	温かい	—	冷たい
	親切な	—	不親切な
	明るい	—	暗い
	活気のある	—	活気のない
	敏感な	—	鈍感な
	ゆつたりとした	—	はりつめた
	親しみやすい	—	気難しい
	信頼できる	—	信頼できない
	根気のある	—	根気のない
	落ち着いた	—	うわついた
	母性的な	—	母性的でない
	清潔な	—	不潔な
	健康な	—	不健康な
	謙虚な	—	高慢な
	知的な	—	知的でない
専門性因子 (10項目)	勤勉である	—	怠慢である
	進歩的である	—	保守的である
	慎重である	—	軽率である
	科学的である	—	非科学的である
	器用である	—	不器用である
	厳しい	—	甘い
	視野が広い	—	視野が狭い
	機敏である	—	緩慢である
	熟練している	—	未熟である
	責任感がある	—	無責任である
労働条件因子 (8項目)	のびのびと働ける (仕事の割に)給与が高い	—	のびのびと働けない (仕事の割に)給与が低い
	軽労働	—	重労働
	安定した職業	—	不安定な職業
	家庭との両立ができる	—	家庭との両立ができない
	休暇がきちんととれる	—	休暇があまりとれない
	社会に十分評価されている	—	社会に十分評価されていない
	高齢まで続けられる	—	若いうちにしかできない
職業イメージ因子 (12項目)	やりがいのある	—	やりがいのない
	患者の理解者である	—	患者の理解者ではない
	やってみたい	—	やりたくない
	子どもにやらせたい	—	子どもにやらせたくない
	資格だけでなく 人間性も必要な職業	—	資格さえあれば 誰にでもできる職業
	おもしろい	—	つまらない
	専任の精神が必要である	—	専任の精神とは関係ない
	ストレスがかからない	—	ストレスがかかる
	女性にも男性にも 適した職業である	—	女性だけに 適した職業である
	医師とは独立した職業である	—	医師の下につく職業である
	開かれた職場	—	閉鎖的な職場
	安全な職業	—	危険な職業

イメージ因子」の4グループに分けた。各グループの平均点は表2に示すとおりである。その中で最も平均点が高かったのが「性格的因子」0.66 (±0.56) であり、次いで「専門性因子」0.58 (±0.57)、「職業イメージ因子」0.27 (±0.45)、「労働条件因子」-0.14 (±0.66) の順であった。

性別でみると、「性格的因子」、「専門性因子」、「労働条件因子」とも男女間に有意差がみられなかったが、「職業イメージ因子」においては女性が0.33 (±0.46) であり、男性の0.22 (±0.43) より有意に高かった ( $p < 0.01$ ) (表3)。

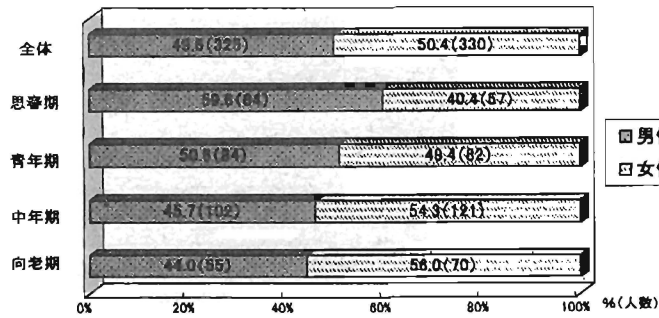


図1 対象者の背景 (年代)

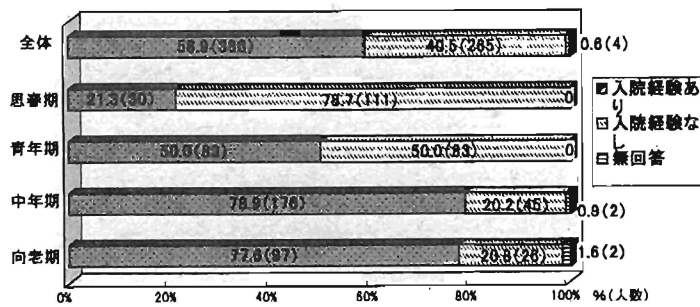


図2 対象者の背景 (入院経験の有無)

### 3. 年代別における看護職イメージの比較

年代別・性別における各グループの平均点は表2, 3に示すとおりである。

#### (1) 「性格的因子」

「性格的因子」において最も平均点が高かったのは「向老期」の0.82 (±0.62) で、最も低かったのは「中年期」0.57 (±0.56) であった。各年代間では「向老期」は「中年期」( $p < 0.001$ )と「青年期」( $p < 0.01$ )との間で、また、「思春期」と「中年期」( $p < 0.05$ )との間で有意差がみられた。

性別でみると、男性で最も平均点が高かったのは

「向老期」の0.91 (±0.52) で、最も低かったのは「中年期」0.63 (±0.55) であった。「向老期」はどの年代との間にも有意差がみられた ( $p < 0.01$ )。一方、女性で最も平均点が高かったのは「思春期」の0.75 (±0.58) で、最も低かったのは「中年期」の0.52 (±0.57) であった。「思春期」も「向老期」も「中年期」との間に有意差がみられた ( $p < 0.05$ )。男女間には有意差はみられなかった。

#### (2) 「専門性因子」

「専門性因子」では、「性格的因子」と同じく「向老期」の平均点が0.79 (±0.65) で最も高かった。

表2 年代別におけるイメージ

	性格的因子	専門性因子	労働条件因子	職業イメージ因子
全体	0.66(0.56)	0.58(0.57)	-0.14(0.66)	0.27(0.45)
思春期	0.70(0.53)	0.51(0.52)	-0.09(0.71)	0.17(0.52)
青年期	0.63(0.48)	0.61(0.48)	-0.42(0.55)	0.22(0.37)
中年期	0.57(0.56)	0.49(0.59)	-0.12(0.62)	0.28(0.41)
向老期	0.82(0.62)	0.79(0.65)	0.17(0.68)	0.48(0.48)
Mean(SD) * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$				

表3 性別におけるイメージ

		性格的因子	専門性因子	労働条件因子	職業イメージ因子
全 体	男性(n=325)	0.70(0.52)	0.58(0.54)	-0.14(0.65)	0.22(0.43)
	女性(n=330)	0.62(0.59)	0.58(0.60)	-0.14(0.68)	0.33(0.46)
思 春 期	男性(n=84)	0.65(0.49)	0.48(0.48)	0.06(0.65)	0.12(0.44)
	女性(n=57)	0.75(0.58)	0.54(0.58)	-0.32(0.73)	0.23(0.62)
青 年 期	男性(n=84)	0.67(0.49)	0.60(0.51)	-0.51(0.53)	0.11(0.33)
	女性(n=82)	0.59(0.47)	0.61(0.44)	-0.34(0.56)	0.33(0.36)
中 年 期	男性(n=102)	0.63(0.55)	0.53(0.58)	-0.15(0.56)	0.28(0.42)
	女性(n=121)	0.52(0.57)	0.45(0.60)	-0.08(0.66)	0.27(0.40)
向 老 期	男性(n=55)	0.91(0.52)	0.77(0.54)	0.17(0.69)	0.46(0.47)
	女性(n=70)	0.74(0.69)	0.80(0.73)	0.17(0.67)	0.51(0.50)
		Mean(SD)    **p<0.01    ***p<0.001			

「中年期」の平均点が0.49(±0.59)で最も低かった。「向老期」が「中年期」と「思春期」( $p<0.001$ ),そして「青年期」( $p<0.01$ ),また、「青年期」が「中年期」( $p<0.05$ )と有意差がみられた。

性別でみると,男性では「向老期」が0.77(±0.54)で最も高く,「思春期」0.48(±0.48)で最も低く,「向老期」が「思春期」( $p<0.01$ ),「中年期」( $p<0.05$ )と有意差がみられた。一方,女性では「向老期」0.80(±0.73)で最も高く,「中年期」0.45(±0.60)で最も低く,「向老期」が「中年期」( $p<0.01$ ),「思春期」( $p<0.05$ )と,また,「青年期」が「中年期」( $p<0.05$ )との間に有意差がみられた。男女間には有意差はみられなかった。

#### (3)「労働条件因子」

「労働条件因子」については,「向老期」の平均点が0.17(±0.68)で最も高く,「青年期」-0.42(±0.55)が最も低かった。その中で「向老期」がどの年代とも,また,「思春期」や「中年期」が「青年期」との間に有意差がみられた( $p<0.001$ )。

性別でみると,男性では「向老期」が0.17(±0.69)で最も高く,「青年期」-0.51(±0.53)で最も低く,「青年期」がどの年代よりも平均点が低く有意差がみられた。一方,女性では「向老期」0.17(±0.67)で最も高く,「青年期」-0.34(±0.56)で最も低く,「向老期」が「思春期」と「青年期」( $p<0.001$ ),そして「中年期」( $p<0.05$ )と,「中年期」が「思春期」( $p<0.05$ ),「青年期」( $p<0.01$ )との間に有意差がみられた。男女間においては「思春期」で男性が女性( $p<0.01$ )より「青年期」で女性が男性( $p<0.05$ )より有意に高かった。

#### (4)「職業イメージ因子」

「職業イメージ因子」においては「向老期」の平均点が0.48(±0.48)で最も高く,「思春期」0.17(±0.52)で最も低く,年齢に追って好イメージを

もっている。その中で「向老期」がどの年代とも( $p<0.001$ ),また,「中年期」が「思春期」( $p<0.05$ )との間に有意差がみられた。

性別でみると,男性では「向老期」が0.46(±0.47)で最も高く,「青年期」0.11(±0.33)で最も低く,「向老期」が「青年期」と「思春期」( $p<0.001$ ),そして「中年期」( $p<0.05$ )との間に有意差がみられた。また,「中年期」が「思春期」( $p<0.05$ ),「青年期」( $p<0.01$ )との間に有意差がみられた。一方,女性では「向老期」0.51(±0.50)で最も高く,「思春期」0.23(±0.62)で最も低く,「向老期」が「中年期」( $p<0.001$ ),「青年期」( $p<0.05$ ),「思春期」( $p<0.01$ )のどの年代との間にも有意差がみられた。男女間においては「青年期」で女性が男性より有意に高かった( $p<0.001$ )。

#### 4. 入院経験の有無と看護職のイメージとの比較

入院経験の有無による看護職のイメージを比較してみると(表4),「性格的因子」,「専門性因子」,「労働条件因子」,「職業イメージ因子」の項目とも平均点に有意差はみられなかった。また,どの年代も全ての因子においては入院経験の有無による平均点の違いに有意差はみられなかった。

さらに,性別における入院経験の有無による比較検討をしてみると,男性では「性格的因子」において「青年期」で,入院経験のある人の平均点0.82(±0.42)が入院経験のない人の0.58(±0.51)より有意に高く( $p<0.05$ ),「向老期」で入院経験のない人の平均点1.19(±0.42)が入院経験のある人の0.84(±0.52)より有意に高かった( $p<0.05$ )。他の3因子においてはどの年代も入院経験の有無による有意差はみられなかった。

一方,女性では「労働条件因子」だけにおいて,「思春期」で入院経験のある人の平均点-0.60(±0.76)が入院経験のない人の-0.23(±0.70)より

表4 入院経験の有無とイメージ

		性格的因子	専門性因子	労働条件因子	職業イメージ因子
全 体	入院あり(n=386)	0.64(0.56)	0.58(0.60)	-0.13(0.68)	0.29(0.45)
	入院なし(n=265)	0.68(0.52)	0.58(0.52)	-0.16(0.63)	0.25(0.45)
思 春 期	入院あり(n=30)	0.70(0.59)	0.53(0.56)	-0.29(0.82)	0.07(0.50)
	入院なし(n=111)	0.69(0.51)	0.50(0.51)	-0.04(0.66)	0.19(0.52)
青 年 期	入院あり(n=83)	0.67(0.45)	0.63(0.46)	-0.46(0.54)	0.22(0.37)
	入院なし(n=83)	0.60(0.51)	0.59(0.49)	-0.39(0.55)	0.22(0.36)
中 年 期	入院あり(n=176)	0.55(0.59)	0.47(0.62)	-0.09(0.64)	0.28(0.43)
	入院なし(n=45)	0.64(0.48)	0.56(0.46)	-0.21(0.53)	0.28(0.30)
向 老 期	入院あり(n=97)	0.76(0.62)	0.75(0.65)	0.16(0.69)	0.46(0.49)
	入院なし(n=26)	1.01(0.55)	0.92(0.65)	0.18(0.61)	0.58(0.46)
		Mean(SD)			

り有意に低かった ( $p<0.05$ )。

## 考 察

今回われわれは看護職に対するイメージについて一般学生及び一般社会人655名に対して質問紙法によるアンケート調査を行い、年代別に比較検討をした。

### 1. 年代別の比較

看護職におけるイメージについて全体傾向として「性格的因子」の平均点が0.66 (±0.56) で最も高く、看護婦に対しては優しさや「天使」のような職業という印象が強いと考えられる。一方、「労働条件因子」においては他の因子に比べ 全体的にマイナスイメージをもっている。

年代別で見ると、「性格的因子」においては「向老期」がどの年代よりも好イメージ的で、特に「中年期」( $p<0.001$ )、「青年期」( $p<0.01$ )との間に有意差がみられた。神谷<sup>12)</sup>が「向老期」を「この時期の人間は朝晩『老いの自覚』というひそかなものを、心の中に抱いていかなければならない。この自己対自己の内容がそれまでとは違うからである。それはあるいはすでに40代から始まっていたかもしれないが、向老期でははるかに切実な、意識的なものとなってくる。」と述べたように、この時期は老化現象の顕在化ないし顕在傾向にあり<sup>13)</sup>、老化による心身の弱化から死を意識し、不安をもつ面がある。それとともに、この時期は医療機関に関わり、看護婦に接する機会も多く、看護婦を頼りにしているあるいは頼りにせざるを得ず、看護婦のイメージに期待が含まれていることも考えられる。さらに、この年代はこれまで生きてきた人生について、到達感、成就感、充実感といったポジティブな面や、豊かな人生体験から思慮深さ、寛容、忍耐力、生活の知恵といったプラス面の性格や生活態度を身につけてい

るため<sup>14)</sup>、看護婦への評価もほかの年代よりも寛容になっている面と遠慮している面もあるので、その年代の背景を考慮してケアをする必要があると思われる。また、「思春期」が「中年期」より好イメージで両者間に有意差がみられた ( $p<0.05$ )。「思春期」は医療に接する機会に個人差はあるものの、看護婦と接する機会はこの年代に比べて少なく、看護婦への関心も低いと考えられるが、この時期は子どもから成人への身体的・生理的变化に伴う心理的・社会的・文化的発達段階であり、マスメディアや従来の白衣の天使がそのまま反映され、好イメージになったものと考えられる。

次に「専門性因子」については「向老期」は「性格的因子」と同様に、どの年代よりも有意に好イメージであった。また「中年期」も「性格的因子」と同様に「向老期」( $p<0.001$ )や「青年期」( $p<0.05$ )よりも否定的なイメージであり、三者間に有意差がみられた。「中年期」は「団塊の時代」といわれる者が多く含まれる。この時代の者は常に人生の中で“競争”から逃れられなく、世の中の変化に大きく関わってきた。学校や社会では競争にもまれ、学園紛争と、核家族化、ニューファミリーという新たな生活形態とともに青春時代を過ごし、ビートルズ時代、VAN 世代とも呼ばれるように、さまざまな流行やライフスタイルを生み出してきた。今日では会社に見放され、リストラ、早期退職、出向などという逆境に立たされている<sup>15)</sup>。このような厳しい時代の流れの中で生きてきた「中高年」は、物事に対する評価、あるいは看護職に対する評価も厳しいのではないだろうかと考えられる。「サブカルチャーの担い手でもあった彼らは、より『こだわり』のあるもの、自分らしいものを求める傾向にある。ハッピーリタイアメント世代が社会性や協調性、他人からの評価を重視するのと違い、非常に自分本位だ」<sup>16)</sup>と

山崎が述べているような団塊世代に対し、看護者としてその年代の背景を理解し、その年代にあったケアを考えていく必要があるのではないかと示唆される。

そのほか「専門性因子」において「性格的因子」に比べ、「思春期」だけは平均点が低かった。これは、他の年代に比べ有訴者率も通院者数も少なく、自由記載の欄にも「実際にお世話になったことがないからわからない」という意見もあり、専門的領域に触れる機会が少なく、イメージが沸きにくいと思われる。

「労働条件因子」においては他の因子より平均点が低く、「向老期」を除いて、すべての年代がマイナスイメージであった。近年、看護を取り巻く状況は改善されつつあるが、依然として一般女子労働者より、超過勤務時間は長く、勤務体制は不規則で、夜勤回数は多いから労働条件がよいというイメージがあると考えられる。その中「青年期」の平均点が特に低いのが特徴的であった。これは「青年期」という年代が社会における生産的メンバーとして独り立ちし、活躍していく年代でもあり、労働条件などの職業問題についてより深く関心を寄せていることの現われだと思われる。

性別でみると、「青年期」では男性が女性よりも「労働条件因子」を否定的に考え、両者間に有意差がみられた ( $p < 0.05$ )。『看護に関する世論調査』で国や地方公共団体に対する要望として「看護に当たる処遇を改善すること」を答えている人の割合は「青年期」では男性のほうが女性より多く<sup>10)</sup>、今回の調査も同じ傾向であった。また、「思春期」の女性が男性より否定的で有意差がみられた ( $p < 0.01$ )。女性は男性に比べてやや看護婦への関心が高いと考えられる。天野<sup>11)</sup>は「看護婦の職業をどのようにみているかをみると、男子学生（大学2年生）で“大変とは思わない・ぜんぜん大変とは思わない”というものがほんの少しではあるがあった。ただ、女子学生（大学2年生）には全くないことは、同性としてそれだけ看護婦という職業に対して理解が深いと考えてよいのではなかろうか」と述べている。また、内閣総理大臣官房広報室による『看護に関する世論調査』においても、看護婦（士）の仕事についての興味や関心に、15～19歳の男女間に大きな差が見られ、女性のほうが看護婦の仕事について興味や関心が高かったとあるように今回も同様な結果が得られた。

最後に「職業イメージ因子」においては全体的に

プラスイメージに傾いている。「向老期」が他のどの年代と比較しても有意に好イメージであった ( $p < 0.001$ )。それは「性格的因子」と同じ、看護婦は“頼りになる人”“頼れる人”と思っているため看護職に対しても好イメージをもっていると思われる。

## 2. 入院経験の有無による比較

全対象者を入院経験のある人とならない人に分け看護婦のイメージを比較してみると、どの因子においても、入院経験のある人とならない人との間に有意差はみられなかった。次に、各年代においても入院経験の有無による統計学的に有意な差はみられなかった。その理由として考えられるのは、最近テレビなどのマスメディアによって、看護を報じられることも多く、入院を経験しない人でも看護婦の働く姿をみる機会があることと、対象者には入院経験はなくとも、外来治療の経験のある人が多く、何らかの形で看護婦に接した経験があることが影響しているであろう。

性別でみると、男性では「性格的因子」において「青年期」で入院経験のある人の方が入院経験のない人より好イメージであった ( $p < 0.05$ )。一方、「向老期」の男性では入院経験のない人の方が入院経験のある人よりも好イメージであり、両者間に有意差がみられた ( $p < 0.05$ )。「向老期」は「青年期」に比べ、慢性疾患に罹患する人が多く、入院期間も長くなる。また、高齢者が長い人生の中で自己のライフスタイルができ、適応能力も「青年期」よりは低下している。そのため入院生活は高齢者にとって受け入れにくく、ストレスとなる。高齢者にとって入院生活そのものが負担となり、入院したという事実が、看護婦に対してマイナスイメージに作用したものであると思われる。

また、女性では「労働条件因子」において「思春期」で入院経験のある人が入院経験のない人よりイメージが否定的であった ( $p < 0.05$ )。女性の中でも「思春期」は看護婦への関心が高いと前述したが、「思春期」の女性は看護婦の仕事を興味をもってみているし、看護婦という職業に対して「白衣の天使」というイメージをもっている。しかし、自分が描いていた看護職のイメージと、入院して実際にみた看護婦の働きとを照らし合わせると、その労働条件の厳しさを感じ、イメージが変化したと考えられる。

## 結 論

今回、一般学生や社会人を対象に看護職に対するイメージの調査を行い、年代間のイメージの違いや性別、入院経験の有無による違いについて検討し、

以下の結果が得られた。

1. 看護職のイメージを全体的にみると、「性格的因子」の平均点が最も高く、次いで「専門的因子」、「職業イメージ因子」、「労働条件因子」の順であり、特に看護婦の労働条件についてはマイナスイメージをもつ者が多かった。
  2. 年代別にみると、各因子群においては「向老期」が他の年代よりも看護に対して好イメージをもっていた。また、「労働条件因子」においては「青年期」が最もネガティブなイメージを示しており、看護婦の労働条件についての関心が強く、問題意識をもっていた。
  3. 性別でみると「職業イメージ因子」においては女性が男性よりも看護職に対して好イメージを持っていた。また、「労働条件因子」、「職業イメージ因子」に対し、「青年期」の女性が男性より有意に好イメージをもっていた。
  4. 入院経験の有無による比較では、「青年期」の男性で入院経験がある人の方がいない人に比べ、看護婦の「性格的因子」に対し好イメージをもっていた。逆に「向老期」の男性は入院経験のない人の方がいる人より看護婦の「性格的因子」に対し好イメージをもっていた。
- 引用文献
- 1) 水野智：看護学生の職業イメージ，エキスパートナース，8(8)，331，1992。
  - 2) 梅田和子他：看護職のイメージに関する研究—看護婦と患者・他の医療従事者・医師・一般成人との比較—，第29回日本看護学会論文集—看護管理—，92，1998。
  - 3) 長谷川小真子他：看護職に対するイメージについての検討—看護大学生と看護職従事者が持つイメージの比較から—，福井県立大学論集，第16号，123-134，2000。
  - 4) 細見明代他：看護婦自身による看護イメージと適応感，神戸市立看護短期大学紀要，12，47-58，1993。
  - 5) 真鍋淳子他：看護学生の看護イメージの研究—大学生と短大生の比較—，看護教育，35(6)，427-433，1994。
  - 6) 鶴田来美他：短大生の学年による看護婦志向性と看護婦イメージに関する研究，順天堂医療技術短期大学紀要，7，72-82，1996。
  - 7) 大谷和代他：看護学生の入学動機別看護婦イメージ等の経年的変化から探る看護教育の課題，看護展望，22(9)，1038-1045，1997。
  - 8) 藤原ヤスエ他：看護婦像に関する一調査，看護教育，21(10)，624，1980。
  - 9) 石塚百合子他：看護婦イメージの研究，看護教育，23(7)，446，1982。
  - 10) 正田美智子他：高校生の看護婦に対する意識調査，看護教育，34(3)，192，1993。
  - 11) 真鍋淳子他：看護学生の看護婦イメージの研究，看護教育，35(6)，427，1994。
  - 12) 神谷美恵子：こころの旅，158-159，日本評論社，1994。
  - 13) 鎌田ケイ子：新版看護学全書31 老人看護学，9，メヂカルフレンド社，1996。
  - 14) 鎌田ケイ子：新版看護学全書31 老人看護学，28，メヂカルフレンド社，1996。
  - 15) 特集 岐路に立つ団塊の世代—団塊世代のこれからの生き方，エコノミスト，79(36)，71-83，2001。
  - 16) (総理府)内閣総理大臣官房広報室：看護に関する世論調査，8-11，世論調査報告書，1993。
  - 17) 天野隆雄：新人類は看護婦をどのように見ているか—看護婦の注意すべき点について考える—，看護教育，28(9)，575，1989。